

# まつかぜ

平和学園小学校  
同窓会連絡誌

茅ヶ崎市富士見町5-2  
電話 0467 (82) 0093

私は五十七年四月より小学校長として着任させていただきました。

昭和二十四年よりキリスト教の信仰を持ち、平塚福音キリスト教会の信徒として四十年の教員生活を過しましたが、平塚の公立小学校を最後に退職し今回、平和の小学校長に命ぜられました。

私の夢のひとつに、聖書を学びイエスさまのお話しが自由に来る学校で教員をしてみたい望みがありました。それは公立の小学校では絶対に出来ないことです。この度平和学園に迎えられましたことは、神様の不思議な導きと恵みというほかありません。松風のささやく美しい静かな環境、幼小中高と多くの先生方と共に、

現在在籍している子供たちの教育に当たらせていただくことによって、同窓生の皆様のお仲間入りが出来ることが大きな喜びとします。幸い創立に近い頃から勤務下さっている横山先生を中心として諸先生方が

活躍下さっていますので、大へん力強い限りです。皆様のご後援をいただきましたこと、お願ひ申し上げます。

現在児童数はちょうど百名です。平和の子供は明るく大らかで、自由に伸び伸びと成長しているのが特

## 松風と讚美歌のきこえる学校へ

### 着任のごあいさつ

小学校長  
笠野欣二

色であるように思います。品位のある制服姿の児童は天使のよう。「聖書にもとづく人間教育」それは唯一の神を畏れ、イエスさまの愛をいただくことです。皆様の学ばれた時代と同じように、毎朝の職員礼拝、児童礼拝から一日が始まります。これはすばらしいことです。キリスト教主義学校として当然のことですが、あえて書かせていただきます。

一学期私学ならではの行春の運動会に続き、十月九日秋の運動会を計画しています。七月六年生の修学旅行は三泊四日の日程で、高山北陸方面へ増淵・三橋先生と共に十五人の旅、楽しい思い出となったことでしょう。毎土曜日の特別活動も続けられています。合唱金管ドラムと専門の先生のご指導のもと、十月二十三日音楽祭として講堂で発表の予定、午後PTAのバザー、おたのしみコーナーが計画され、今から準備して

事を経験しました。五月の自然教室は二年から六年まで二泊三日御殿場の東山荘で行いました。縦わりのグループ編成による共同生活、乙女峠金時山登山、助け合いいいたわりあって平和小ならではの教育の場でした。

最後に児童募集に対するご協力をお願い致します。在籍百名ですが一年生七名、

二年生九名と、ここ二年間著しく入学者が激減しています。このままでは学園（小学校）の将来が憂慮されます。なんとしても理想的な二十名内外の入学児童が得られるよう願っています。同窓生の皆様のご両親は、皆様を平和学園に学ぶことに誇りを持ち、その教育に期待して入学させられたことと思います。皆様のお子様にも同じ期待をお寄せ下さい。また友人知人に学園をご紹介いただき、皆様があつていられる平和学園の発展のため、児童募集に対して格別のご協力をお願い致します。私学として皆様のご期待に応えるよう、努力致します。

夏休み中鉄筋校舎の外壁の塗装をし、白亜の校舎が松の緑に輝いて美しくなりました。小学校の充実を象徴しているようです。折にふれご来校下さるようお待ちしています。

## 「松風」によせて

小学校同窓会会長

二十五年卒 大石茂生

小学校の三年で終戦を迎えたといえ、時代がおかわりのことと思う。アメリカ人が進駐してくると日本の国はどうなるのだろうか、例え、危害を免れたとしても何が起るかかわらない。勿論、生き延びるためのわずかな食べ物も供給されるとしても好き嫌いなどいってはいられない、そんな時期に学園に学んだのである。従って、集まった生徒もいろいろな環境の人で、だいたい二十五人から三十人位のクラス編成であった。昔から茅ヶ崎の地元に住んでいる者は少なく、戦争のために東京などから疎開（都心の危険を避けて田舎へ避難すること）して来たり、焼け出されて茅ヶ崎や辻堂の別荘に移り住んで通学していた仲間もいたようである。又、当時は白十字会林間学校（現在の福祉法人）の名

前の方がよく知られており、その寮生が沢山参加していた。健康に恵まれない人や国外からの友人もいて一緒に勉強していた。弱い者は互いに助け合い、言葉の不自由な仲間も仲良くしようという思いやりの中で、実に自由な雰囲気と国際的な感覚が養われていた。これらは当時の賀川豊彦理事長、村島婦之園長の尊い教えであり、今日もみんなが誇りと感じていいることである。

## 小学校の思い出

二十二年卒

田中茂夫

しかし、戦争で焼け残った校舎と生き残った先生（失礼ですが）、それに栄養失調の生徒では学んだといっても知れている。今ある中高のグラウンドも当時われわれが授業時間に勉強を休んでモッコ（土を運ぶざる）やパイスケを担いで土や松の根っ子を運んで造りあげたものである。体裁や形式ではない、理屈や理論ではない、例え環境が違い肉体的や精神的な条件が違っても、自分が可能な限り全力を出し切ることに、そして互

私は今年の三月に懐かしい茅ヶ崎へ帰って来た。小学四年生から九年間、多感な少年時代を過した思い出の地に。

平和学園高校を卒業してから、東京・信州・名古屋と、学校、勤務に伴って生活してきたのであるが、再び第二のふるさと茅ヶ崎に永住することにして戻ってきたのは、約三十年ぶりにもなるか。

想いおこせば平和学園とのご縁は、太平洋戦争たけなわの昭和十八年に東京から茅ヶ崎に疎開してきて、当時の白十字会林間学校の

三年に転校し、家族と離れて入寮したのが始まりであった。

二十年には相模湾に米軍が上陸との危機感が高まったため、新潟県へ疎開した。林間学校と別れて、家族と信州へ疎開して終戦を迎え、その年の冬に林間学校の五年に復帰した。

やがてキリスト教教育による平和学園が、賀川豊彦先生を理事長に、村島婦之先生を学園長にお迎えして設立され、私達も同窓小学校の初代の生徒となったのであった。

その創立期の六年生時代のこととなると、三十一年前のこととて想い出すのに苦勞するが……軍国主義教育から民主主義、そしてキリスト教教育へと百八十度の転換に、子供心にとって見るもの聞くこと全てが新鮮な驚きであった。

当時の講堂で村島園長先生が、貧民街で恵まれない人々を救うために尽された、ペスタロッチの肖像画をも

とに話して下さったことは、鮮烈な印象として記憶している。そしてアメリカでの経験談や、ベースボールという競技のルールを説明されたことも、旺盛な知識欲を満たして下さったものである。

さらに私達にとって幸福であったことは、岡本先生というリベラリストの素晴らしい担任の先生に恵まれたことである。

厳しいなかにも愛情のこもった教育方針で導いて下さったうえ、話術・漫画やレタリングなども抜群であり、毎日あの砂地の校庭で一緒に野球を教えこんで下さるなど、私達は当時名づけられた「どんぐり学級、どんぐりチーム」のニックネームを誇りに思ったものであった。

また大学時代入部していた児童文化研究会の旧友たちを招んでこられて、学会の折に人形劇などを演じて下さったのも、娯楽に乏しかった当時としては、ど

んなに嬉しかったことか：

こうして書いてみると、あの噴水池・プール・食堂・木造の校舎などが、少しずつ懐かしく思い出されてくるものの紙数も尽きたので、平和学園小学校の健全な発展を祈って終りしたい。

### 心のオアシス

二十七年卒

向井春子

七月も半ばのある日、平和学園小学校時代のことを何か書いてほしいと電話でたのまれお引き受けはしたものの、わか小学校時代は三十数年も昔のこと、丁度



いる。学校の休み時間に描いた卒業生の似顔絵にコメントをつけた本を、去年暮出版した。題して『先生、こんな顔じゃないよ』

二番目の娘が小学五年生で、当時の自分の姿をわが子のそれに重ねて思い比べてみた。しかし今の子供達とあの頃の私とは何かから何迄あまりにも違いすぎるのである。当時は敗戦後間もない欠乏の時代、飢えの時代であった。物質的には全く恵まれてはいなかったが、わが平和学園の中は精神的豊かさで平安に満ちていたと思う。讚美歌を歌い、大橋先生の聖書の話に幼い耳を傾けた礼拝の時間、そして村島校長先生はじめ諸先生方との心のふれあいを通して私達は目に見えない多くの事を学んだ。荒廃した社会の中にあつて平和学園

後藤橋比古君は三十二年卒だが、今横浜国大附属鎌倉中学の美術の先生をして

### 「先生、こんな顔じゃないよ」

おほえてゐる東門先生の話もある。千秋社八八〇円、附属でのあだ名は「ゴトセ」

はオアシスであった。身体は弱い子、不自由な友達をいたわり、そして対等に仲良く遊ぶのが当たり前と教えられた。非行など入り込む余地もなかった。教師をテーマにしたテレビドラマがブームの昨今であるが、私達の恩師の先生方はドラマの主人公以上に、ある種の理想的教師像の一面を既にあの頃から備えていらしたと、今にして感じる事しきりである。担任の横山先生から星座を共に眺めて宇宙の神秘と素晴らしさを教えて頂いたことは今も忘れない。私達、横山先生の第一期生は、毎年一回先生を囲んで開く横哲会と称する

四十才以上の卒業生ならおほえてゐる東門先生の話もある。千秋社八八〇円、附属でのあだ名は「ゴトセ」

(横山)

クラス会を心待ちにしている。我家の娘達は私の小学校時代を羨ましいという。何故であろうか。

### 高等学校が終つて

三十二年卒

米山悦子

平和学園には、小学四年生から中学二年生迄在籍しました。楽しい思い出が数多く残っています。家庭の都合で中学卒業と同時に就職をして、八年間会社勤め。その後、結婚しましたが子供に恵まれず、八年目にやっとなりの子が誕生です。育児に明け暮れている内に、何かしたい、何かしなければ、と考え始め、私はまだ高校に行っていないから仕事に思い当たり、よしと自分身と子供の為にも勉強しようとうと決心。幸いに夫の理解と協力を得て子供が二才の時、通信制の高等学校へ入学をしました。入学試験はなかったのですが、勉強はかなり厳しいもので、毎

日、ラジオ・テレビを視聴して、期限に従ってレポートを提出。これは日頃の自分の学習の成果を先生に見てもらふ為です。月に一度のスクーリング。朝九時から夕方五時迄みっちり。この出席によって単位をとり、これも予想以上に難かしく、全日制と変わらないと聞いています。一応、試験の一週間位前から、試験勉強に取り組むのですが、何とか落ち着かず頭に入りません。何せ十八年ぶりの勉強で、頭の回転が今一歩の状態で、でも私などは良い方で、四十代、五十代、六十代の仲間もいて、お互いに励まし合つて頑張っています。一日で五つ六つの科目に挑戦なので、最後はどうでもよくなってきます。ただ、全日制と違うのは、終わったあと先生と一緒に乾杯する楽しみがあります。勿論アルコールで。こんな事の繰り返しを四年間してきました(通信制は四年で

卒業となる)。途中で止め  
る人も大勢いましたが、私  
は家族の協力で、何とか四  
年間過ごす事が出来ました。

卒業式の時、校長先生か  
ら、一人一人に卒業証書を  
手渡し下さり、言葉をか  
けて下さった。この時の卒  
業生は三百人前後だったと  
思う。同級生の中には、全  
日制、夜間、通信制の大学  
各種学校、と進学する人も  
大勢いた。私は子供が小さ  
い事などもあって、今回の  
進学はあきらめました。で  
も希望は捨てずに、次の機  
会を待とうと思っています。  
生涯教育とは少々大げさだ  
けれど、いつの日かにきつ  
と。

こうして、通信制高等学  
校を終える事ができたので  
す。今年の三月の事で、学  
歴が高卒になりました。  
三十七才でやっと。

Aさんのこと

三十七年卒

樋口 明

私がAさんと出会ったの  
は、昼休みにピアノの置い  
てある部屋で、フルートを

吹いている時でした。気が  
付くと誰かが部屋のドアを  
押しています。ドアの所へ  
行ってみると、車椅子の小  
柄な女性が「ピアノを弾い  
てもいいですか」と尋ねる  
ので、昼休みもそろそろ終  
りでしたから「どうぞ」と  
部屋の中へ入れてあげまし  
た。すると車椅子のままで  
けっこう器用にピアノを弾  
き始めました。しかし、片  
手は麻痺があるようですし  
足はペダルを踏めるような  
状態ではありませんでした。

彼女は音楽学校のピアノ  
科の学生でしたが、不幸な  
ことに脊髄炎という病気で  
全身麻痺になったのです。  
私の職場は、身体障害、  
精神薄弱、老人を主体とし  
た二つの病院と七つの施設  
からなる神奈川県総合リハ  
ビリテーションセンターで  
す。

彼女は、リハビリテーシ  
ョンの訓練のために入院し  
たのです。それからは職場  
で楽器を扱う仲間と一緒に  
彼女とセンターの会議室や  
小さなレストランを借りた  
りして演奏会を開いたもの  
です。彼女は学校へ復学し

たかったようですが、どう  
も無理だったようです。病  
院を退院してからも、セン  
ターの施設に入所して訓練  
を受け採用されて元気にやっ  
ているようです。あの小さ  
なAさんが大きな試験を乗  
り越えたのです。

私は小学校を卒業後松浪  
中学、鎌倉高校から明治大  
学に入學しました。大学で  
は主に財務会計をやってい  
ましたが、昭和四十七年に  
大学を卒業して、神奈川県  
庁内にありましたリハビリ  
テーションセンター準備財  
団に就職し、約一年後に、  
センターが厚木市七沢の山  
の中に完成したので、そち  
らに移りました。早いもの  
でもう十年になります、

この十年間で障害者を取り  
まく環境はかなり進歩しま  
したが、欧米先進国に比べ  
ると、まだかなり遅れてい  
るのではないかと、私には  
感じられてなりません。



「人は心に自分の道を  
——聖書」

四十二年卒 小原ゆき子  
平和学園を卒業してから  
十五年。その間に様々なこ  
とがありました。あつと  
いう間だったように思われ  
ます。その中で私の人生を  
決めた二つの出来事につい  
て書かせていただくと思  
います。

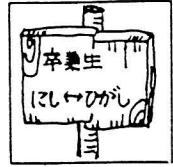
その一つは大学受験の時  
の事です。高校三年間、生  
徒会活動にのみ燃えた私は  
どの先生からも浪人は必至  
と言われておりました。が、  
ひょんな事から学校に余っ  
ていた願書を貰って受験し  
た。志望とは無関係の教育  
系大学に受かってしまった  
のです。教師になる気は全  
くなかったのですが、「こ  
れは神から与えられた勉強  
のチャンスであろう。」と  
考え、それ迄文科系志望だ  
った私は、四年間化学を中  
心に理科を学ぶ事にいたし  
ました。

二つ目は就職です。大学  
を出たものの就職はせず、  
語学の勉強がしたくて、ア

ルバイトをしていた私は、  
またふとした事から不勉強  
故合格する筈のない教育採  
用試験を受験し、既に教員  
免許を持っていたため、突  
然九月採用という通知がき  
てしまったのです。この時  
は語学を続けたい気持ちも  
ありましたが、「これも神  
の与えて下さったよい機会  
やれるだけの事をやってみ  
よう」と心に決めました。

瞬く間にそれから丸五年。  
現在は藤沢の中学校で理科  
を教え、忙しくもやりがい  
のある毎日を送っています。  
こうした経験から、今後進  
路を決める子供達にも、自  
分に与えられたよい機会を  
生かして、「あの時やっ  
ておけばよかった」という後  
悔をしない人生を送って欲  
しいと思っています。何年  
たっても足りない事だらけ  
の不良教師ですが、これか  
らもしっかりと最善を尽く  
して参りたいと思います。

最後に、今こうして一人  
前に働かせていただけるよ  
うになりましたのも、小さ  
い時から多くの良き先生方  
に恵まれ、暖かい指導によ  
って基盤を作っていたのだ  
とおかげと、深く感謝して  
おりますと共に、今後この学  
園のご発展と先生方のご健  
康をお祈りいたします。



高校球児のあこがれの地、甲子園にあと一歩というところまで行った平和OBがいる。

# 甲子園へあと一歩

## 惜しかった大輪君

信州工業高校野球部  
監督さんは平和のOB

三十一年卒業の大輪弘之君。平和時代から野球好きのガキ大将。亜細亜大学の選手として東都大リーグで活躍した後、長野県塩尻市の信州工業高校の監督になつて十六年。指導がようやく実り、今年の信州工業は強かった。四回戦こそ三点的リードを九回にひっくり返してやっと勝つ、という苦戦だったが、五試合を勝ち抜き決勝戦進出。甲子園出場三回という丸子実業との対戦も、相手を上回るヒット数、キビキビした守備、と互角以上の試合だった。だが勝運は丸子実業に五―六。一点差の惜敗だった。

園出場三回という丸子実業との対戦も、相手を上回るヒット数、キビキビした守備、と互角以上の試合だった。だが勝運は丸子実業に五―六。一点差の惜敗だった。

をすればいい。新人を鍛える秋のシーズンに休みながら、チームを優勝を争うところまでもっていった。甲子園に若い血をたぎらせるのは、高校生ばかりではない。もう一歩の壁——大輪君なら打ち破ってくれるだろう。

「大輪君なら、甲子園で同窓会」がほくた

「正直なことをいうと、今年こそは、とねらっていた。あと一本だったんだけど……。やっぱり甲子園は難しい。でも、初めて優勝を争えたいし、またやり直します」。

大輪君は昨年に大手術

(高垣君は朝日新聞の記者です)

(三十一年卒 高垣徹蔵)

### 告知板

この秋の行事をお知らせします。

○運動会 十月九日(土)

○音楽会・バザー

十月二十三日(土)

運動会の卒業生種目はたいてい二人三脚ということになってます。あこがれの先生やクラスメートと腕を

組んで走るのはいかがですか。バザーには卒業生コーナーに出店して大いにもうけて下さい。



### 飛び出せ社会へ

四十七年卒

亀谷佳津美

夏休みに入り、就職活動とアルバイトに励んでおりましたところ、突然、小学校の担任の先生でありました横山先生より、同窓会の新聞に載せるので、何か書けとの連絡をいただきましたので、恥ずかしながら、一筆啓上させてもらうことになりました。

私は現在、東京都立大学の経済学部で席を置いておりますが、長かった学生生活も残すところ数ヶ月になり、来春より社会に飛び出して行こうとしています。

小学校、中学校、高等学校、そして大学と驚くほどの速さで過ぎ去ってしまい、当時の平和学園の先生方も私がかこの夏、就職のことで頭を痛めているなど想像もつかないことであろうと思えます。

ところで、彼多に小学校のことを思い出さないのですが、平和学園ののびのびとした、おおらかな校風が私に与えた影響は極めて大きなものであった様に思います。とにかく、いたずらの得意な学年でしたので、先生方にも迷惑ばかりかけていました。理科室の薬品を勝手に持ち出して遊んだり、夜まで学校に残って天体望遠鏡で星を見せて貰ったり、毎日がスリルの連続でありました。そうした中で自然に責任に対する自覚が、芽生え始めたのではないかと思います。一学年三十人未満の学校だからできたことなのでしょうが、私はこれから社会の一員となり、荒波にもまれることになりませんが、そんなときでも平和学園で教わった、おおらかさと、人に対して思いやりを持つ精神を忘れないように心がけたいと思っております。



## 卒業してから

## 五年半

岡田恵理沙

平和学園小学校を卒業してからもう五年半。ついこのあいだ中学校を卒業したと思っていたのに、もう高校生活も最後の年になってしまいました。現在、平和学園で私の教室のある四号館校舎は、小学校と隣接しています。ですから、小学生を見るたびに自分の小学校時代を思い出します。すると、懐かしさと同時に時代の経過を痛切に感じます。たとえば小学生と一緒に遊ぶとき、小学生は、何に対しても必死、かつ、真剣にぶつかっていきます。それを多少離れた目で見ることでできる自分は、小学生の世界は、まったくこの世の中とは別の、何か神秘的なヴェールにでも包まれた、特別な世界であるような思いがしました。時代の経過はもろろんのこと、自分自身の成長をも改めて感じま

した。少人数のクラスで好き勝手に振る舞い、自由放漫が許された中学時代の日々。そして高校に入学して、ちよびり男女共学校を羨ましく感じながらもいっしょうけんめい学び、しゃかり遊んでとうとう高三の夏休み。世間一般の高校三年生は、みな大学受験の真最中で必死で勉強しているでしょうに――。私はこれから始めようなどと呑気に構えていて、「これでいいのか」と自問自答している始末です。これでは現実と理想のあいだに葛藤が生じるのも当然のことです。しかし、このように考えてみて、中学の三年間と高校の二年半、ただ漠然と年月を過ごしていたわけではないことを認識しました。とはいっても、その根底には、平和学園小学校でしか得ること

のできないものが根づいていると思えます。それは他の卒業生も同じだと思えます。今後、困難にぶつかるとき、人生の岐路に立つと

きなど、いろいろなことがあると思いますが、平和学園で学んだ「希望は失望に終わることはない」という聖書のみ言葉を忘れることなく頑張っていこうと思えます。

## 「平和

## 今むかし」

養護教諭

三橋富子

卒業生の皆さん、お元気でしょうか。私が平和学園へ来たのは戦後十三年目のこと、それから早二十数年

その間、卒業生を二十数回見送ってきた訳ですが、名簿を見てみると、在学時代の幼いヤンチャな顔が浮かんできます。男の子も女の子も伸び伸びと、そして生き生きと、先生にも友達のように親しみ易く、気兼ねなく話しかけてくる明るい子供達の顔です。

んが小学生位になっている頃、それ以前の人達は中学生以上のお子さんかおられるかも知れませんね。そして子供さんの教育に一意専心しているところでしょうか。小学生なら、中学はどの私立が良いかしら、中学生なら…… などの親として頭を痛めていられる年頃かと推察しています。

これは平和に限らず何処でも同じ事でしょう。でも古い卒業生にとって、あの山のある小学校が、何よりもなつかしい事だと思います。校舎も、自分達が学んだ校舎がなくなつたという事は、心の故郷がなくなつたように思うかも知れませんね。その上担任の先生も辞められてしまったクラスの人達は殊更と思いません。しかし、あの古い講堂は大分床が落ちていますが、今でも毎朝礼拝に使っています。それに、モルタルの古い校舎と古音楽室、理科室もまだあります。

さて、この長い間には学校もいろいろ変化してきました。時代が変れば又已むを得ないのでしょう。戦後の物のない時代から、何か何迄物が豊富になってきている今の時代、それ故戸惑うのは私達だけなのかも知れませんか。時の流れと共に学校も色々と、様々に変わってきたと言えるでしょう。

一昔前は予防注射が種々あったり、健康診断も色々あったものですから、授業はなくても全部の生徒に関わっていたから、私からみれば全生徒が教え子だった

と思えるのです。それだけにみんなの顔をよく覚えていたつもりです。でも小学校を卒業するとどんどん成長していき顔も変わるので、学校以外の所で逢ったのでは、話かけられなければ分からないかも知れません。案外何処かで逢っているかも知れません。此方は大人ですから、しわが何本か増える以外は変わらないですけれど。生徒さんの方では見て分かってても、此方が気がつかないでそのまま……でも平和小学校で学んだ子供達にはそういう人はいないように思います。むしろ此方が気が付かない時に、遠くの方から「先生」と呼びかけて下さった事が何回ありましたから。

そんな親しみ深い平和の卒業生の皆さん、どうか母校を忘れないよう、なお母校が益々発展するように、協力をお願いします。

各々が歩んでいる道は様々でも、平和で培われたものは皆同じと思います。それは昔も今も変わっていない筈です。初めの人から最近の人まで同じ平和の卒業生として、平和を盛り立てていって下さい。先生方は皆同じ思いでしょう。

**生徒募集に協力を!!**

近年生徒が減って困っています。ここの一、二年がひどいのです。このままだと平和の小学校も、＼ん十年で店じまいなんてことにならないように、先生たちもがんばってますが、皆さんの御後援をぜひお願いします。先生になって帰ってくるのはわりにはありますが、子どもを小学校に入れてくれる人が少ないのです。まあ経済問題もあることでしょうが、三人いたら一番下の一人は絶対平和に入れるとか、そのところはひとつ工夫してみてください。「親の顔が見たい」とはよく言いますが、先生たちは「子どもの顔がぜひ見たい」

平和学園を離れて一年半が過ぎました。そして最近になってやっと生活のリズムができてきたように思います。生活が変わるといふ事は私達人間にとって、本当に大変な事だと思えます。子供たちと共に精いっぱい一日を過ごし、採点だガリ切りだと夜半までの仕事に追われての毎日から、あら余る時間にどう遊んでもらおうかと思いなやみましたが、やっと、毎日が日曜日の生活に慣れてきました。すきな洋裁をしたり、レース編みに熱中したり、その結果、近所の人に喜んでいただいたりすれば、それが又自分の喜びとなり、生きがいとなっています。

又、庭の片隅に植えた茄子やピーマン、きゅうりなどはじめてにしては見事な実をつけてくれましたし、朝もぎたての茄子の味噌汁の味など勤めていた時には味わえない喜びです。そして今一番の楽しみの一つは、朝目がさめてベッドの上に

起きあがり、ガラリと窓をあけると飛び込んでくるのが朝顔の花。夏のはじめ頃はきょうは三つ咲いた、明日は五つ咲くなあとお数えるのが楽しみでしたが、今はもう数えきれぬ程見事な花を咲かせ、毎朝五十、六十の花を見せられます。それが、ながめているうちに目がぼちりとあき、今日も一日がんばらなくてとは力が湧いてくるように思います。

それにしても思い出されるのは、学校にいる頃、一年の理科教材として朝顔を育て観察したこと。それが一回も成功しなかった事。あの頃は、今年こそは立派な花を咲かせようと、よい種を選び肥料を買い、土まで購入して子供たちと相談の上で毎日をやり、

二葉が出るとさあ肥料、本葉が出ると又肥料、つるがのびた、さあ竹を立ててと丹精したのに、いつもヒョロ、ヒョロのつるが伸びて貧弱な花が一つか二つ。それに比べて今庭に咲きほこっている朝顔は、種をまいたあと自然のままにまかせてあったのに、毎朝数十の花を樂しませてくれるのはなぜでしょうか。何か今の子供たちの教育にも共通するものがあるような気がしてなりません。立派に育つようにと手をかけ心をかけすぎて、かえって子供たちがみずから伸びようとする大切な芽を摘みとっているような、子供をゆがめているような事は無いでしょうか。もっと自然に、大胆に子供の育つ力を信じ、暖かい目で見守ってあげられたら、もっとおおらかな、伸び伸びとした子供たちが育つような気がしてなりません。

又、暇にまかせて肩のこらない本を、ずいぶん読み

## あの日、あの時、そして今

真能敦子

あさっています。少しも覚えていないのはなぜでしょう。前に読んだ本の方がよく覚えていてお話しなどしてあげられるのに、最近の本は、読んでいる時だけで忘れてしまいます。これこそボケのはじまりかしらと気にしています。

人間ボケないためには、死ぬまで働き続けることだとか、早く仕事をやめすぎたかな、とも思っています。でも、あの参観日や父兄懇談会がないだけでも命がのびるような気がします。病弱な主人をかかえて、主婦業に専念しているこの頃です。

### 平和学園小学校 の思い出

山口 誉之

私が平和学園小学校へ赴任したのは昭和四十四年四月でした。当時は今の二階建校舎がまだ建築中で松林の中に二教室ずつ三棟の木造校舎が点在していま

した。自然に恵まれた環境の中で子供たちは伸び伸びと育ち、一人一人個性豊かな存在でした。はじめの頃は、そんな彼等のユニークさには、いぶんな振り回されたものでした。失敗談も少なからずありますが、それは別の機会に譲ることにしまして、今回は最も思い出深いことを記すことにします。初めて担任させていただいたクラスが、いよいよ卒業間近かとなり何を卒業記念に残すか思案中の時でした。某先生から「日時計にしなさい」と知恵を授けられました。何か教育的に意味あるものをと考えながら適当なものが見つからず、困っていた私は大喜びでそのアイデアにとびつきました。ところが喜びは日時計完成の際に何倍にもふくれあかったのです。と言いますのは、日時計の中にタイムカプセルを入れることになったからです。子供たちの六年間の思い出はカプセルの中に封じ込められて遠い未来へ

つながることとなりました。クラス全員で色々考えて録音テープや各自の宝物など入れましたが、何と云っても一番なのは二十四人の子供たちの平和学園小学校時代の思い出そのものでしょう。その時彼等と約束しました。西暦二千年九月二十三日正午、この日時計の周りに集まりタイムカプセルを開けようと。平和学園小学校という教育環境で、子供たちと夢を語り、難問に悩み、汗まみれ砂まみれの毎日の子供たちと心がひとつになれた時代でした。またそれが平和学園小学校の教育の特色であると思えます。

昭和五十七年八月現在、平和学園高校教師となって五年目の夏休み、これも平和学園小学校一年生の長男の宿題や、生意気盛りの次男の相手をさせられながら、この原稿を思い出すままに書き記しました。



今年の松風は卒業生のを主にしました。平和という名が始まったらしい二十二年卒の田中君から五年おきに一人ずつ選んで書いてもらいました。従って来年は、二十三年、二十八年といく予定です。

五十四年十一月に全校同窓会を開いてから三年たち、今年はその予定でしたが、中高と連絡をとっているうちにおそくなり、まだ開催のめどは立っていません。学校としては来年五・六月がどうかと思います。役員会では名簿を作ってくれています。九月の中頃には出来るそうですから、各学年委員に問い合わせ下さい。「卒業生西東」には、皆さんの動向をのせたいので、同級生のニュースを送って下さい。又編集の仕事も来年はもう卒業生に任せたいと思います。

(横山)